

市制40周年

からいも伝来300周年

郷土芸能大会



出演芸能

10月31日(土) 14:00~15:00

- ・古田棒踊り
- ・どすこい
- ・ヨンシー踊り
- ・なぎなた踊り

11月1日(日)

11:00~12:00 14:00~15:00

- ・安納棒踊り
- ・花踊り
- ・虚無僧踊り
- ・獅子舞
- ・新地節
- ・兵児踊り
- ・横山盆踊り
- ・めん踊り

解説 下野敏見先生

(鹿兒島純心女子大学教授)

会場 西之表市民体育館広場

主催 西之表市

共催 西之表市教育委員会

西之表市無形民俗文化財
保存連絡協議会



由来

日置郡から安城に移住後、古田に住むようになった上妻次郎氏が、大正10年、当時青年会員の上妻静馬氏等に教えたのがはじまりである。

その後、毎年古田の豊受神社の願成就の余興として踊り伝えられたものである。

特徴

棒と鎌との打ち合いが特に激しく勇壮な踊りである。入場・棒突き・踊り1回目・踊り2回目・退場で構成される。

歌やはやしに合わせて踊り、早くて勇ましくテンポのよい踊りである。

歌詞

- 1 今こそ参る
神に参詣す
- 2 焼野のキジは
岡の瀬に住む
- 3 オセロが山は
前は大川(だいかわ)
- 4 鎌の柄が折れた
三束(さんば)切りおく



由来

今から約130年前の江戸末期、今の三重県から洲之崎を訪れた人によって伝えられたといわれ、当時の25代島主種子島久高公の御前でも披露された。

また、大正元年に集団赤痢が発生したときに、病魔退散のお払いとして八坂神社境内で奉納している。

特徴

「どすこい」は、角力とり節ともいわれ、全島数か所に分布し伝承されているが、洲之崎のものは、歌詞が違い、踊り、歌ともにしっかりしているといわれる。

それは、はじめ島主に見せるため踊ったためだといわれる。

歌詞

- 1 日にちやー毎日 たかせが昇る
昇るやー たかせが一度でくだる
- 2 嬉しゅやめでたの若殿様よ
五葉もやーしごけでせもよけれ
- 3 ひとせー古松 みどり葉の上で
鶴がやうーたえばさんま 亀が舞う
- 4 稚児の前髪を切らさるならば
わしも切りましよう さんま袖下を
- 5 つつじ椿は 野山を照らす
殿のおめしは なら照らす
- 6 障子あくれば角力場が見ゆる
明日はどの手でなぐるやら



由来

昔、庄司浦の人々が琉球を旅するうちに、琉球で習ったものを故郷に帰り踊り始めたものであり、その時期は定かではないが、150年位前ではないかと思われる。

特徴

琉球王の御殿を建てるとき、山師が木を切り、村人が運び出し、山方が家材にこしらえ、大工が細工をして、造りあげる様に歌踊りを付けたもの。それぞれの仕事の道具を持って踊り、種子島の他に例を見ない、たいへんユーモラスな踊りである。

2番あり、それぞれに出唄、引唄がある。琉球語で伝えられており、庄司浦の人々も、その意味を知らない。

歌詞

- (出唄) サー サー サー サー
声いいでとーくどいてみましょ(アーヨイヨイ)
さらば 東西 静まり給え(ソクヨイ ヨーイ ヨーイヤナ)
ハリヤリヤ コリヤリヤ ヤ ハ アトセー
西の大綱の お材木 くだよる(アー ヨイ ヨイ)
地引き車で 地を引いてあげて
(ソウラ ヨーイ ヨーイ ヨートヤー)
ハリヤリヤ コリヤリヤ ヤ ハ アトセー
ふゆかち はやきのか サイ サイ サイ
それとは神妙な 受け声を 受け声
たち声はしとして(アールーレ)
それなら何でも 踊りましょ ヤレ浜松に
浜松に(アールーレ)
きざと鳥が 巣をかけて 小枝を杖に 月をながむるな
※ふいかの エンヤエイ(アールーレ)
ヤコーン さんさのエーヤナー(アールーレ)
へーばろの へーばろの へーばろ 西谷 でふーらせ
色んな黒や 村のはじなるな
※ 繰り返し
西方の 西方の 舞のおどいや 雲とたなびくな
※ 繰り返し
(引唄) えーい えーい あやじよ ぼーぼみち ちくよえん
ちよーなき エイサー 力を合わせ(ソレ) みなちもそろて
ちよおよして はやしのな えーい えーい ちひさ
おどいもく 西のおよまん エイサー 力を合わせ
(ソレ) みなちもそろて ちよおよして はやしのな

なぎなた踊り

国上湊



由来

なぎなた踊りは、口説きもの(親の仇うち)で江戸時代に全国的に流行したものであるが、国上湊にいつ頃伝わったか定かではない。西之表では国上湊と立山(おつや口説き)等で傳承されている。

特徴

口説きには「団七どきき」「おつや口説き」が多く残っているが、国上湊のものは一場面が「志賀團七口説き」、二場面が「上杉源次郎口説き」からなっており、この「上杉源次郎口説き」は国上湊のみに傳承されるもので、「団七どきき」「おつや口説き」にない哀調をたたえ、独特の雰囲気を持っているものである。

歌詞

一施(志賀團七)

(出唄)

国は豊洲坂田の村よ 与太郎翁のみやなぎ・忍
親の仇の志賀團七よ 参お討たんとお江戸に上る
五年この方兵士の旗名 今日が真日 討たねばならぬ
ヨイヨイヨイ 国は豊洲片倉小十郎
小十郎番にした志賀團七よ 三十一歳長崎屋や

(口上)

(女) エイ、いかに比土 舞舞の手にかけられし与太郎が娘
親の仇じゃ。討たねばならん
(男) エイ、何じゃ、女子供 四人ともに一纏にみかけ
与太郎討たるこの太刀刀 放も一掃にしようてやろ
(斬り切る男で唄う)

討ちで争われよ ハッンと浮ゆる
買いこんだる手裏剣抱いて 胸の目によしと当る
日光くらんで うろづきところ 縁は舞臺で
はや討ちかくる
親の仇じゃ今誰だか 白刃ナギナタで首をかけたおいた
(引唄)

(女) 仇討ちたよ アラ願しきよ ヨー
親の守りか その日のげちか 国の殿様 舞臺美をたもる
もうは我が家に ナー帰るはずよー

安納棒踊り(市指定文化財)安納軍場



由来

棒踊りは種子島各地にあるが、いずれも鹿児島本土より明治になって移入してきた芸能である。安納の棒踊りは軍場集落に傳承してきたものであるが、始良郡加治木町より安納軍場に移住してきた大工石野政蔵氏から習ったもの。

棒踊りの良さは激しい太刀さばきと一糸乱れめ集団美にある。元来種子島の芸能は優雅でおおらかである点に特色があるが、薩摩示現流の気合のこもった棒踊りも、種子島に定着した。

特徴

- ・安納棒踊りは、出端、本踊り、引端の四つからなっている。
- ・島内の棒踊りよりテンポが早く、棒の間に鎌が入っている。

歌詞

(出唄)

おしろが山は前は大川 かたげたつとは
中はにぎりめし

(本踊り)

- (1) 焼野のきじは 丘の野に住む
- (2) 山太郎ガニは 川の瀬に住む
- (3) 清めの雨が かさにバアラりと

(引唄)

やや山ではエーヘンヨー大川

花踊り(市指定文化財)国上寺之門



由来

元来「大踊り」といわれ、太鼓を下げた50人の男で踊られていたが、寺之門特有に変化してきて、今の形となった。

口唄では、約600年前位、都の落人が国上の浦田に上陸し、寺之門付近に住み始めた。彼らが都の思い出をこの踊りに託して伝えたといわれる。

特徴

踊りのテンポは極めてゆるやかで、種子島の踊りの中でも最も優雅といわれている。全体の踊りの根底には、早苗植えの所作で、早苗を象徴とした花を持って踊る。

また、疫病退散を祈る「やすらえ花」、すなわち「花しずめ」の踊りも、更に花祭りの要素も加わって、単純化された中にも氣品がうかがわれる。

歌詞

(出唄) 初ひるな一 子げのお空にお願を願し

三十三間の清水で 七日こもりて

兵武のけいこ 一に手裏剣 二で尾刀よ

二で小刀をすらりと抜いたへ

(本唄)

- (1) 酒田ヨソナー 千代娘はなぞ髪や結わぬ
- (2) 櫻もヨソナー ないかよも ないかよ 油もないか
- (3) 櫻もヨソナー ごどろよ櫻も 油もひらも手もごどろ
- (4) 髪もヨソナー できたよ櫻も できた島田の髪が
- (5) 寝たのヨソナー 行徳 運屋 行徳 だが来て消やす
- (6) 種もヨソナー 恋風種の恋風 そと来て消やす

(引唄) 京原大臣五郎 ハラヤナーナー

ヤレヤレヤレ 七ツ時からお伊勢に心

ハラヤナー ナサナー ヤレヤレヤレ

腰にかくたてチョロイ抜け奪る ハラヤナー

腰に隠るな 暇くりよおれ

ハラヤナー ナサナー ヤレヤレヤレ

ここはどこかと 公家衆に問えば

ハラヤナー ナサナー 一も一もヤレヤレ

踊りやいもの また踊りまじょう

ハラヤナー ナサナー ヤレヤレヤレ

これできりまじょう やめまじょうエー

種子島の郷土芸能

種子島の芸能

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれるほど多くの芸能が残されている。

かつて、百数十あった民俗芸能も、現在、過疎化による踊り手の減少、生活様式の变化などで、年々その数は減少しつつある。

種子島の民俗芸能は、種子島大踊り（安城踊り）・源太郎踊り等の大踊り、どすこい・なぎなた踊り等の中踊り・小踊り、それに座敷舞・盆踊り・狂言、工踊り・町人踊りなどに区分される。

日本書紀に天武十年（681）「多福島の人を飛鳥寺の西の河辺に饗（あ）へき。種々（くさぐさ）の楽を奏（おこ）しき」と記録されており、種子島の芸能の歴史は奈良時代までさかのぼることになる。奈良、平安、鎌倉時代と変遷するにつれて、各時代の各種の芸能が流入し、今日の豊かな民俗芸能の島に発展したのである。

種子島の芸能の多くは、10月に行われる願成就（豊作を神に感謝する祭）で披露される。

この日は村中総出で料理を持ち寄り、神社の境内で酒をくみかわし各集落に伝わる民俗芸能を奉納しあい、楽しいひとときを過ごす習わしである。願成就は種子島人の心を表現する農漁村最大のカルチャーフェスティバルということがいえる。

虚無僧踊り



由来

江戸時代の中頃、薩摩藩領内に虚無僧姿で侵入した幕府方の武士に対し、てんびん棒で勇敢に立ち向かった農民の気概をたたえる踊りで、原形は鹿児島市古山中山地区に伝わる「中山虚無僧踊り」（県指定文化財）とされている。

現和上之町には、明治35年頃、伊集院出身の上平太兵衛という人が仕事で現和に住したとき伝えられたといわれている。

特徴

棒踊りの一種である。棒踊りは種子島の各地に伝えられているが、上之町の踊りは、三列編隊で中央に虚無僧が入る。

歌詞

- 今こそ参る 神にもめい
- 焼野のキジは 圃の瀬に沿う
- 山太郎ガニは 河の瀬に沿う
- おしろが山で 前は大河（だいかわ）

現和之上之町

獅子舞（市指定文化財） 古田



由来

明治時代の末、大分県から椎茸の栽培のために古田に移住してきた、川野幸太郎、石井又藏の両氏が地区民に伝えたもの。

大正3年に大正天皇御即位記念として初めて披露され、以来毎年10月に行われる豊受神社の願成就に御神楽として奉納されている。

特徴

獅子2人と天狗と猿2人の5人で舞う。はじめは獅子を相手に天狗が茶化す。やがて獅子が怒って天狗におそいかかる。獅子と天狗の激しい争いが続き、一度天狗が負けるが、やがて活気づき、刀と軍配の巧みなあやつりで、終わりには獅子が力尽きて後退していく。

猿はそれぞれ獅子、天狗側につくが、一定の舞の形はなく、獅子及び天狗の動作をまねしながら、ときどき猿どうし争う。舞の道化役を演じる。舞終わったあと、獅子は1～2歳児の頭を魔まけのため噛んでやる。

獅子も天狗もかなりの体力が必要であり、この役には青年たちがあがっている。

鳴物は太鼓、小太鼓（二人で交互に叩く）、横笛、横笛は古田に自生しているニガタケで作られ、手製のもので、貴重なものである。

歌詞はなく、ところどころで「ホース」という掛け声をかける。

新地節



由来

明治末から大正末期にかけて、前野家に身を寄せた長崎の源吾という人が、柳原のために作り伝えたものといわれている。

特徴

非常にテンポが早く、軽快な歌と踊りである。銭の入った筒を持つ、銭太鼓ひとつであるが、ここでは輪になって踊る。

歌詞

- (5) 新地土手から小山山見れば
アラヨナーなぐれ（アラサイ コウサイ）
お春がかたになら
喜屋山からぼせどん来れども
わたしやお春さんに 文などどってかやうてか
見入はこさうら ござらん
- (7) 新地お役人は この城おせん
アラヨナー焼かじヤ（アラサイ コウサイ）
食われぬ 夏の魚
石垣どんこが願出した 今も出したが また出した
- (8) そつたそつたよ 踊り子がそつた
アラヨナー節の（アラサイ コウサイ）
出陣とりよ 来たそつた
ぶんぶん茶家の ふた取る間がない
かわいねえちやんの取り引く間がない 間がない
- (9) お節どんなやつ だいまさに惚れて
アラヨナー主じヤ（アラサイ コウサイ）
子もおる 妻もおる
田舎のおえさん 汚れはダじゃい
よこれほダテでも かんさしお銀じゃお銀じゃよ
- 河井節五郎 車に乗って
アラヨナー引けよ（アラサイ コウサイ）
初花 これまで
段や郷のそら豆は ひきやれれば みな走る
あたしや夜中引いて走る
ア ソンナジャラ ソゾジャラ

伊集柳原



由来

明治35年頃、宮崎県より丸太という兄弟が椎茸の栽培をするため、現和の西俣に移り住んでいた。この丸太氏が良い踊りを知っているとのこと、それを西俣の若者に教えて欲しいと頼んで教わった踊りである。

特徴

太鼓の音をトン、拍子木の音をキャッキャーともじって、この踊りを「トンキャッキャー」ともいう。種子島の他の踊りに見られない、一種独特のひょうきんさと滑稽さをもっている踊りである。終わりの引庭をテンポを早めながら、最後の一人が引いてしまうまで繰り返す。

歌詞

- 1 和尚さんな どこへ行く
後の小僧さんに問うたれば
はげた頭は とっくりまわせ 姉さん
どうしよかな 杖に花御座
夜着にふとんあ よかんそう なあしな
ほんによかんそう なあしな
- 2 和尚さんな どこへ行く
後の小僧さんに問うたれば
はげた頭は とっくりまわせ 姉さん
どうしよかな 南瓜のごまずり
どじょうのあんかけ うまかんそう
なあしな ほんにうまかんそう なあしな
- 3 おづれ こだま おせろ みかけて
天馬 天神 みぎをすれ
どうすりよ小坂は 茶屋 しばや 花の吉原
船のどいどい 主のねんばい エンサラサ



由来

寛永5年(1628年)、宮崎県高岡の地師北志留信隆(高津家系)は、悪政を理由に種子島に逃奔となったところが国陣の乗取であった阿久根出身の千代女は、単身山の上り後を辿って種子島に渡ってきて、二人は上西横山に住んだ。翌年、国陣は切腹を命ぜられ、このとき千代女も病死した。国陣51歳、千代女35歳であった。横山の人々は、二人の死をいたみ、特に千代女の節婦としての心情をしのいで、旧7月7日にその霊をまつり、踊りを奉納するようになった。

特徴

種子島の盆踊りは、曲も手振りもきわめて静かで莊重、全員がカムキという笛(手ぬぐい)をかぶって踊る。カムキは清浄な響きに人の息がからぬためのおおいであり、同時に踊り手自身が精進であって、静かな中にも響への畏敬をこめたものである。
横山盆踊りは、曲がいくつもあって変化していくが、千代女の部分は哀調切々として、人の心をつく響である。

歌詞

- (出陣) 種子とりでうれし うえなは 武蔵野の
しもくやらん 吾が思い車 茂れ茂れ
おさまる御代こそ めでたけれ
- (めでためでた) めでためでたの 御殿屋敷 小倉九ツ
御門八ツ 船は千艘 御金舟よ 金をおろすは 品川に
- (梅が枝) 梅枝や匂いにかけるわが心
富士のうらばにえおく露 その名 玉かつらかけ しばし
- (煙の小池) 煙の小池 浮いたる舟は 煙の白雲 橋こげや
おしこめと との浦
- (阿久根千代女) 阿久根千代女は 夜舟こぐ
足もだるんど 手もだるんど まして夜風も 寒かるど
寒かるど 寒かるど まして夜風も 寒かるど
阿久根千代女は ちご心 玉草(たますき)に
また唄かえて 花の室の女に やると見た やると見た
やると見た
花の室の女に やると見た 花の室のおんなのおしゃれごと
うつつ名の立つ 玉草を 水に浮草 霞の 坊の とばせに
舟のりて あらし待ちたる心して これも浮世の物語り
- (引籠) せんともみやの せんともみやの 奥の入りには
ちょうと出た よしわか ふじはかまきて 見ればたて
長羽織 襦にやうれし おがのこ よしながきみおいた
おもしろや



由来

古くから踊られてきた民俗芸能で、めんを被りひょうたんを腰にぶらさげて踊るところから「ひょうたん踊り」ともいわれる。めん踊りはいつ種子島に伝来したかは不明であるが、その歌詞より江戸初期ではないかと思われる。

以前は、各家の長男だけが踊り、養子や次男、三男には踊らせなかったという。

特徴

出端の楽拍子、および時々鳴らす太鼓の調子良さはうって変わって、メロディーは一抹の哀愁をたたえながら、独特の節まわしで歌われていく。そのメロディー、拍子のコントラストに加えて、全体が統一された芸能となっている。

めんに猿が混じり、道化役を演ずる。哀調とともに滑稽さもたたえ、多分に室町時代頃の芸能の影響も受けられていると思われる。

歌詞

- 1 金山に 三味線無いとは 誰が云うた
なればこそ こま娘を 乗せてきまやろう
- 2 新舟と 茶舟が無いとは 誰が云うた
なればこそ 竹娘を 乗せてきまやろう
- 3 七曲り小川ですそがぬれたま
小松原入りては 出端も入端も
- 4 ほんになりたよ 大和様のひょうたんじや
昼は御腰に 下げられて
キラタンキラタン